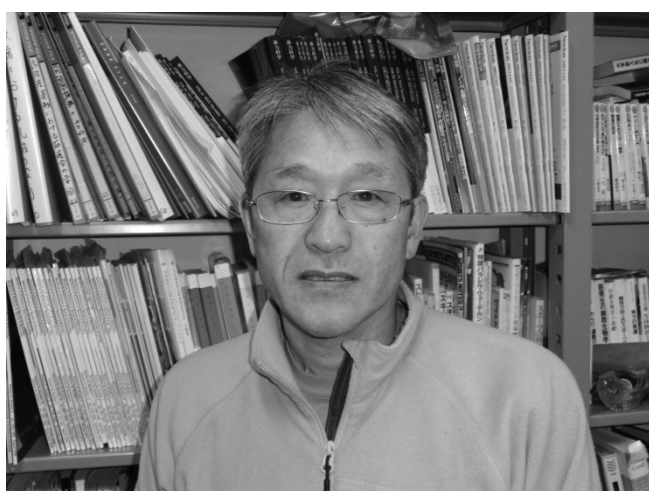


総科のプログラムが なくなるってホント？

この噂は本当なのでしょうか？副研究科長の和田先生に聞いてみました。また、これを機に、今のプログラム体制についても学んでいきましょう。



副研究科長（学部担当）

和田 正信 先生

飛翔編集委員（以下、飛） 和田先生（以下、和）

飛 今の総合科学部の十プログラム制はいつできたのですか？

和 もともと総合科学部ができたのが一九七四年で

す。かれこれ四十年前ですね。その時には基本的に今と同じような四コース制でした。そこから、一九八七年に四コースから七コースに改編し、外国語コースや数理情報コースなどができました。国際化が進んできて、今までの四コースだと対応できない分野に、新しいコースを増やしたというわけです。一九九二年には、もう一つ加わって八コースになりました。それが今のプログラムに近いものだと考えてもらって結構です。このように、何度かコースの数の変化を経て、今の体制になったのが二〇〇六年のことです。つまり、六年前に今の十プログラム制になったということです。

飛 総合科学部の独特のものとして、**超域研究・展開研究**がありますが、これらはいつ始まったのですか？

和 二〇〇〇年からです。今年度が十三回目ということになります。

飛 **超域研究・展開研究**ができたきっかけを教えてください。

和 目的は大きく二つあります。一つ目は、アクティブラーニングのような場をできるだけ設けるため、二つ目は総合科学のベースになる能力を養うためです。学生にいかんが授業での内容を理解してもらうかは、昔からの課題です。授業を

するときに、学生が座って講義を聴くだけでは、やはり学生の理解度に限度があります。教員は

分かりやすく話したつもりでも、テストをすると、全然分かっていなくて、がっかりすることもあります。学生が自分で調べて自分で学ぶように仕向けないと、なかなか学生全体としてみると理解が進まないということです。アクティブラーニングは、そのような学習方法です。例えば、超域研究でやったPBL (Problem Based Learning) もその一つです。ほかの学部でも、教養ゼミや専門の授業でPBLを始めているところもあります。総合科学部の良いところは、同じPBL型の授業をしても、その中には文系もいるし理系もいる、つまり興味の対象が全く違う学生がいることです。そのような人に自分の意見を言う、あるいは、そのような人の話を聞いて理解する能力が、総合科学のベースになる能力です。超域研究でも、問題を作って、いろいろな人が問題解決法を出しますが、それ自体が学際といえれば学際です。そういう総合科学的な発想の基礎を作ろう、というのが超域研究・展開研究です。展開研究は最後にそれを一人でやって、文章で自分をアピールしなければならぬということです。

飛 来年度からは、今あるプログラムが無くなってしまおうという話を聞いたのですが、具体的にどのような形態になるのですか？

和 来年度からどのような形式になるかというところ、まず現在十個あるプログラムを、「総合科学プログラム」という一プログラムのみにして、その中に三つのゆるい領域をつくります。その領域というのが人間探究領域、社会探究領域、自然探究領域です。学生には二年生になるときにこれらの領域の一つに所属してもらいますが、授業の取り方は非常に自由度が高くなっています。例えば人間探究領域に所属した人は、人間探究領域で提供されている授業を比較的たくさんとります。しかしほかの領域の授業も沢山とりたいというのであればそれも可能です。一方で、例えば生命系の分野の専門性を高めて大学院まで行きたいという人は自分の専門性を高めるためのカリキュラムを組み、自然探究領域内の授業を多くとる事ができます。

飛 **領域を選択する際には自分で自由に選んでよいのですか？**

和 基本的にはそうですね。しかし、選ぶ際にはまず全員が一年次の教養ゼミの先生と面談をします。その先生と自分がしたいことや将来について話をし、先生からどの領域を選択してどの科目群から授業をとればよいか、というアドバイスを受けた上で志望理由書のようなものを書きます。それが終わったら次は二年次からのチューターになる先生ともう一度面談をします。そこでもう一度、二年次以降どういう形で勉強し

ていくかという事を決めていきます。相談しながら、学生が勘違いしていること、例えば、この領域ではこういうことができるのだと思っても実は違った、というようなことがないように、二重に話をするのです。そして具体的に二年次の春からどの授業を選択するかを決めます。また、セメスターが終わった時にはチューターが成績を全部チェックし、次のセメスターではこの授業をとるように、といった相談をします。卒業までマンツーマンに近い形の指導ができる体制をとろうと考えているのです。

飛 **三つの領域の中にそれぞれ四つずつ科目群というものがあられるようですが、これはどういったものですか？**

和 これは簡単に言うと授業のかたまりです。学生がそれぞれ所属するというのではなくて、ただ授業のかたまり、というだけです。自然探究領域の中には、物性科学、生命科学、自然環境科学、数理情報科学。人間探究領域の中には人間文化、人間行動科学、言語コミュニケーション、スポーツ健康科学。それから社会探究領域の中には地域研究、越境文化、現代社会システム、社会フィールド研究という科目群があります。

飛 **必ずどれかを取らなくてはいけない、ということではないのですか？**

和 はい。どの科目群を中心に勉強しますか、とい

うことは聞きますが、目的があるのであれば複数の科目群のなかから様々な授業を少しずつ取ることもできます。それに対して、一つの科目群のなかから沢山取って、ほかを少ししか取らない、ということもできます。これが「自由度が高くなる」という意味です。

飛 **なぜ来年度から体制を変えるのですか？**

和 まず、プログラム制というのは、広島大学が全学で行っているものです。例えば、教育学部の中にも、たくさんプログラムのプログラムがあります。ただ、教育学部の場合は、音楽や国語など、それぞれがかなり独立しているので、一つずつがプログラムになっていのも自然な話です。しかし、総合科学部はもとと一学部一学科です。その中に全学で示されたプログラム制を敷かなければならなくなって、今の十プログラム制にしましたが、そうすると一つのプログラムの独自性が高くなって、学科のような形にならざるを得なくなりました。今の十プログラムの制だと、総合科学部と言いつつながら、ある一つのプログラムに所属したときにそのプログラムのカリキュラムに大きく縛られて、他のプログラムの授業を取る自由度がかなり低くなるという問題点がでてきたからです。

飛 **今年度まであった超域研究・展開研究はどうなりますか？**

和 来年度から、名前としては、超域研究・展開研究は無くなりません。ただ、完全に無くすわけではなくて、それに代わるものを作ります。まずその一つとして、一年生の前期に『総合科学へのいざない』という必修の授業が入ります。これはどちらかというと講義科目で、総合科学というものがどのようなかを考えていきます。

飛 学部長や副学部長が自分の学生の時の例を話したり、社会で活躍している総合科学部のOBを講師に招き、社会における総合科学といった話をしてもらったり、ということをやります。また、後期には『総合科学概論』という授業を導入します。その中では特に、二年次から所属することになる総合科学部の中の領域あるいは科目群の中で、具体的にどのような事をしているのかという話をします。それから、今年度まで超域研究でやってきたような、PBLをします。そして最後には、論文の長さは少し短くなりますが、今の展開研究のようなものを入れます。超域研究・展開研究が無くなるという形ではなく、リニューアルするという形ですね。

飛 来年度からは、超域研究のように、グループで一つのことについて調べてまとめるのは無くなるのですか？

和 総合科学概論で、そのようなことをします。だから、無くなるわけではありません。

飛 なぜ超域研究・展開研究の名前を無くすのですか？

和 特に大きな意味はありません。せっかく変えるんだから、新しいブランドに古いブランドのものを残さないように全部変えてしまおう、というくらいの理由です。

飛 来年度からの体制に、他にはどのような特徴がありますか？

和 先ほど四つの科目群がそれぞれの領域にある事を話しましたが、他にも二つ新しい科目群が導入されます。学際科目と呼ばれるものと、専門共通科目と呼ばれるものです。これは先ほどの領域の中の授業科目群に属するのではなくて、所属する領域に関係なく取ることができ、これらの科目の中にまたいくつかの授業があります。

飛 学際科目は具体的にどのようなものですか？

和 まず学際科目について説明しますが、その前に“総合”と“学際”についての違いから説明します。例えば、何か一つのテーマに対して複数の分野の人が話をすることを聞いたとすると、“総合”的な話を聞いたという事になります。それはあくまで、いろいろな研究分野で得られた知識を教えてもらったという事です。一方“学際”はというと、ある分野で生み出された知識だけでなく、どういう研究方法でそれが生まれてきたかという研究方法まで知ってもらおうという

事です。それを一つの分野だけではなくて、この分野では、こういう研究方法・解決方法でこのような知識が生まれ、違うところでは、違う手法での解決によって、このような知識が生まれたのだ、という風に複数の分野で学んでもらいたいのです。要するに、違う分野での単なる得られた知識を教えてもらうだけではなくて、その研究手法をいくつか学ぶというものです。それで、本題に戻りますが、授業科目群の中に一つずつの授業というのは、それぞれの先生が専門的なことを話す事になりますよね。これは“総合”に値するので、学際性を高めるために“学際科目”を新たに取り入れるのです。

飛 つまり、学際科目では研究の方法まで視野に入れて学ぶと考えればよいですか？

和 そうですね。というのも結局、例えば社会に出ると、今まで出会ったことのない問題にぶつかってくる。また、時代が変わると、十年前には絶対発生しなかったような問題が起こってきます。それを皆さんが解決しなければならぬという立場に追い込まれたときに、いろいろな解決方法を知っていれば、どれかが応用できます。単に知識だけ知っていても、それはできません。だから、解決方法も含めて学んでほしいのです。それを学ぶのがこの学際科目なのです。

飛 専門共通科目は具体的にどのようなものですか？

か？

和 専門共通科目は、どの分野でも共通して必要とされるであろう事を学べる授業を科目群として集めたものです。例えば、外国語をより詳しく学ぶ場合、現在では言語文化プログラムでのディベートの授業等があります。しかしこれからの時代は、言語文化プログラムに所属する学生だけではなくて、どの分野を学ぶ学生にとっても語学は必要な力になってきます。そのため、そのような授業はピックアップして共通してどの領域の学生でも学べる形になるのです。他には倫理的な授業も専門共通科目の中に入っています。これはこの先研究を進める上で写真や論文を引用したり、アンケートを実施したりすることがあると思いますが、その時に著作権の問題や個人情報の問題等に直面することがあるかと思えます。それらの問題に関して、例えば、どうしてコピーアンドペーストをしてはいけないのか、またそれを行うことによってどのような問題が起こるのか、といった倫理的な授業もどの分野の学生にも共通して必要であるため、共通科目として取り入れたという次第です。

飛 授業の枠組みが変わるといことですね。

和 授業をもう一度整理すると、一年次の必修科目としては、『総合科学へのいざない』と『総合科学概論』。二年次からは、三つの領域のどれかに所属はしますが、かなり自由度が高くなった授

業の選択ができます。ただし、学際科目だけは必須科目となっています。専門共通科目に関しては必須ではないので、取っても取らなくてもかまいません。

飛 これから総合科学部では、アクティブラーニングが増えてくるでしょうか？

和 それは各先生の授業形態によって違いますね。そして、定理や公式などのきっちり教える部分と、アクティブラーニングでやったほうが効率が良くなる部分の使い分けをしていくことになると思います。実は僕たちも全員ではありませんが、夏休みに PBL の講習を受けました。どういう講習かというと、僕たちが学生役と先生役に分かれて、学生役はあなたがたと同じように文章を見せられて、付箋にキーワードを書いていって、問題を作ります。その日の夜にそれぞれの分担を調べて、次の日の午前中にそれぞれが調べてきたものを持ってきて、ストーリーを作って、パワーポイントを作って発表するという、すごくタイトな日程でした。

飛 講習の中での学生役・先生役は広島大学の先生方だったのですか？

和 学生役には外部の先生もいらっしやいました。学生役五〜六人で一つのグループでしたが、僕たちのグループのうち、二人は外部の先生でした。

飛 講習のほうは、私たちの超域研究よりつらそうですね。

和 すごくつらかったです。もともと、コンピューターは使い慣れているので、作業自体は速くできますが、結構へとへとになりました。

飛 私たちの代までは十プログラムに分かれますが、次の代からは分かれなくなりますよね。その中で、「この領域を学んでいる」という縦のつながりはあるでしょうか？

和 来年度からプログラムに分かれなくなると言っても、それぞれの授業科目群と今のプログラムとの関係が全く無くなるわけではないので、「この領域を学んでいる」というつながりはできやすいと思います。ただし、来年度からの学生は、授業科目群ではなく領域に所属することになるので、領域全体といくつかのプログラムという形でのつながりになると思います。

飛 ありがとうございます。

【担当】

24生 上野 裕介

24生 栗栖 千尋

24生 江 永如

24生 原田 みずほ